
魔法少女リリカルなのはstrikers -colors of the magic-

サンコン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは strikers - colors
of the magic -

【Nコード】

N19010

【作者名】

サンコン

【あらすじ】

ある日少年が目覚めると、そこは何もない黒い世界だった。何もなく、誰も居ない。そこで少年は、ある遭遇を果たす。

魔法少女リリカルなのは strikers - colors of the m

機動六課

「ふう、お疲れ様。フェイトちゃん」

「お疲れ、なのは」

そんなやり取りをしているのは、高町なのは、フェイト・テストアロツサである。

二人は訓練を終えた後だ。

「スカルエツティの件以来事件が起きていないから平和だねー」

「うん・・・」

フェイトは心細い返事を返した。

彼女は不安を感じていた。

大きな魔法事件の後には必ず、連鎖して事件が起きる可能性があるからだ。

現に闇の書の事件後、その残宵がまた事件を起こした。

「ねえ、なの・・・」

ピリリリリリリリ・・・

フェイトが何か言おうとした時、不意に連絡が入った。

画面を見るとそこにはクロノが写っている。

「どうしたの？クロノくん」

「大変だ、なのは！」

「クロノ。何があったの？」

「とりあえず説明は後だ！2人とも本局まで来てくれ！」

「え？クロノく・・・」

ブツッ

なのはが呼び止めようとした瞬間連絡が途絶えた。

「なのは・・・」

「とにかく行こう」

「うん」

こうして物語は始まった。

魔法少女リリカルなのは s t r i k e r s - c o l o r s o f t h e m

ある日少年が目覚めると、そこは何もない黒い世界だった。
何もなく、誰も居ない。そこで少年は、ある遭遇を果たす。

「ここは暗いな」

声がする。

黒く、暗く、深い。まるで深海を表したような少年の音がする。

容姿は恐らく12歳前後だろうか。黒い髪に生気の抜けた瞳を持ち、一言で言い表そうとするなら【黒】が思い浮かんでくる。

そして、それを映したかのようにこの場所も黒く、暗く、深い。

「本当に何も見えないな」

繰り返すように呟く。

そんな自分に対し少年は

退屈だな・・・

と思い始める。

やがて、その感情は苦しみへと変わっていく。

「ああ、退屈だし・・・なりより寂しくて苦しいな」

少年は聞こえない程度の声で何度も何度も繰り返す言う。

それにも疲れた少年はやがて、思考を停止させる。

・・・

その感情に意味がないから考えるのをやめる。自分の考えを誰も聞いてくれないから考えるのをやめる。

それと同時に、この空間に響いていた声も消えていく。

そこに【黒い影】が現れる。

この空間の【黒】と【黒い影】の【黒】は同じはずなのに、なぜか見えてしまうそれに少年は驚くと同時に別の感情が湧いてくる。

【黒い影】はやがて、人のかたちをとりはじめる。

『よお』

【黒い影】から声がし、またこの空間に響き渡る。

「・・・」

どう答えていいのか分からず少年は戸惑う。

『まあ、そう固くなるなよ。折角招待したのに』
口調からか【黒い影】は笑っているように思える。

「・・・いくつか質問していい？」

少年の口から自然とその言葉が出た。

『ああ、別にいいぜ』

「ここはどこ？」

『ここは俺自身、って言っても信用できないか。まあ、別に信じなくてもいいけど』

「それなら君が招待したってことになるのか・・・。少しは分かった」

『へえー。意外と話がわかる奴だな。普通なら、もっとリアクションとるぜ？』

【黒い影】は拍子抜けしたような声を出す。

「まあ、今更疑ったって仕方がないからね」

『ハハッ。それもそうか』

「夢なら夢で覚めてくれたらうれしいんだけどね」

『そりゃ残念だ』

そして少年は気づく。

この【黒い影】が現れたときに湧いてきた感情に。それは、単純に【何かが居てくれて安心できるという】安堵感そのものだったことに。

こんな単純な会話に安心できるだなんて

少し笑みを浮かべる。

「じゃあ、一番肝心の質問をするよ」

『まあ、予想はできるが・・・』

「何のために僕をここに呼んだの？」

『まあ、【騎馬】を決めるためだな。お前が来たのは偶然さ』

「偶然？」

『大半はな。でも、少しは選抜するんだぜ？』

「選抜か・・・」

少年の頭の中に新たな疑問が生まれる。

「多分これが最後の質問だと思う。【騎馬】っていうのは？」

『役割としては、俺の【魔法】の力に関するこの管理と、肉体の貸し借りだな』

「んー【魔法】？想像してもあんまり実感湧かないな」

『そりゃあお前は【魔法】を知らないからな』

「空想のものだと思っていたよ」

『それは、人間の勝手な決め付けだな。嘘のものだとしても、名称や詳細が人々に知れ渡った時点でそれは名称 だけでも存在していることになるからな。俺はそう考えてるぜ』

「なかなか深い話だね」

少年はやはり笑みを浮かべている。

『さ、雑談は終わりだ』

【黒い影】はそう言うと、少年の足元に透明の【魔方陣】を作り出す。

「儀式的なもの？」

『ん？まあそんなとこだ』

少年は目の前で【魔法】が起きているのにそれにまったく動じない。

『逃げないのか？』

「なんで？」

『今までがそうだったからな』

「別に逃げてどうにかなるものでもないでしょ」

『そりゃそうだ』

【黒い影】がそう言うと、少年は少し黙りまた話しかける。

「最後に一言いい？」

『最後ってまるで死ぬみたいじゃねえか』

「死なないの？」

『そんな面倒くさいことはしないさ。意思も普通に残るぞ』

「そうなんだ・・・じゃあ、また今度でいいや」

『りょーかい。じゃあ始めるぞ』

透明の【魔方陣】まほうじやんはやがて黒く染まってい

『Reissanctuary(リィサンクチュアリ)』

【黒い影】くろいかげがそう呟くと少年の意識は途絶えた。

第97管理外世界 極東地区 現地惑星名称【地球】ちきゅう

陸上国家【日本】にほん 関東地区 海鳴市 藤見町

ここに1人の少女が居た。その少女は、その世界では他の皆となんら変わりなかった。しかし、ある日少女は1匹の動物と出会い【魔法】まほうを知ることになる。

この出来事によって物語りの歯車が動くとも知らずに……

魔法少女リリカルなのは **s t r i k e r s - c o l o r s o f t h e m**

クロノから緊急召集を受けた、なのは、フェイトは本局に向かい、
ある異常を伝えられる。その内容とは？

次元管理局本局

「高町なのは、着きました」

「フェイト・T・ハラウン、着きました」

本局の中は意外と明るく、夜になってもそこそこのざわめきが残っている。

「よく来てくれた。早速で悪いが、本題に入るよ」

そう切り出してくるのはクロノ・ハラウンである。

「実は今なのは生まれた世界、つまり第97管理外世界の【地球】ちきゅうで魔力異常が起きているんだ」

「【地球】ちきゅうで!？」

「ああ」

「でも、なんで私達を緊急招集なんか・・・」

「・・・。実はこの魔力異常、尋常じゃないほど広がりがあるんだ。密度も半端じゃないし、魔力量も相当だ」

焦りをみせるクロノ。

その額には汗が流れている。

「とりあえず、解決に行つてきます!」

「いやっ、・・・ああ。気をつけて・・・」

「・・・?はい」

「とにかく、急ごう。フェイトちゃん」

「うん」

本局を後にする2人。

その姿をクロノは、焦りつつただ見ていた。

第97管理外世界

極東地区

現地惑星名称

【地球】ちきゅう

陸上国家【日本】にほん

関西地区

白公市

有空町

時刻は正午前。有空町にも日差しが降り注いでいる。いつもと変わらない人達、光景。

ふと太陽に雲がかかる。黒い雲だ。

なんだあ？雨でも降るのか？ 洗濯物が・・・
などと住民たちの囁きが聞こえる。

「なんだろねえ？沙耶ちゃん」

「太陽に雲がかかっただけじゃないの？」

そんなやり取りをしているのは、有月静哉と輪道沙耶である。

有空町には小、中、高と学校があり、全て名に有空と付いている。

ちなみに2人が通っているのは【有空小学校】で小6ある。

「それより！あんたいい加減私を【ちゃん】付けにして呼ぶのやめなさいよ！」

「？でも、沙耶ちゃんは沙耶ちゃんじゃないか」

「ハア！。ダメだこりゃ」

2人はいわゆる幼馴染である。

小さい頃、親の転勤でこの町に引っ越してきた静哉にいろいろしてくれたのが沙耶である。

2人が話し合っていると、いきなり視界が暗くなった。

なにになに？ 何も見えないんだけど！ せんせー！

などと生徒達がざわめき始める。

「静哉？聞こえる？」

「・・・」

沙耶は静哉に話し掛けるがいつこつに返事が返ってこない。

「ねえ。静哉？」

「・・・」

なんど呼んでも返事がない。

不信に思った沙耶は辺りを見渡してみる。が、何も見えない。

何も・・・見えない？

沙耶に鳥肌がはしる。

「さっきまで窓から外の景色が見えたはずなのに……」

そう、学校の電気だけでなく太陽の光までもが消えているのだ。

そして、急激に気温が下がる。

「っ……」

沙耶だけでなく、周りの生徒、有空町の住民全員が寒さを感じる。

「静哉！静哉！！！」

教室中にその叫び声が響く。

その瞬間、一気に視界が戻り寒さが和らぐ。

しかし、その瞳に映ったのは誰も居なくなった教室だった。

それどころか窓越しに外を見てみると、視界が途切れるまで走つて

いた車の列は止まり、町のざわめきも全く聞こえなくなっていた。

そして空には……

視界が消えた瞬間静哉には声が聞こえていた。

恐らくそれは、人間の声ではない。もっと別のものだ。

『さあ、相棒。行こう』

ずっと呼びかけてくる。

「相棒？君は誰？」

『誰とはつれねえなあ。まあ、随分前のことだし忘れるのも無理はないか』

「随分前？」

『まあ、そんな事はいい。時は満ちた。俺に力を貸せ』

「何を言ってる……」

そこへ、静哉の頭の中に映像が流れてくる。

そこには、暗い空間で小さい頃の自分と【黒い影】くろいかげが話しあっている図がある。

「っっ……ああ」

頭を抱えこむ静哉。

『これが真実だ』

声が笑っているのが分かる。

『わかったら行くぞ』

「うん・・・その前に」

『ん？』

「久しぶり」

その静哉の顔には笑顔が浮かんでいる。

そして静哉に視界が戻る。空に浮かんでいるようだ。

「なんつーか、空に浮くなんて考えられねえよ」

『そう、文句を言うなって。なかなか体験できないぞ？』

「まあそうか」

静哉は辺りを見渡す。そこで何かを発見する。

「ここ、誰かが境界張ったんだろ？なんで沙耶がいるんだ？」

『さあ、お前の一番身近にいたからな。魔力干渉でも起こしんじや

ねえのか？』

静哉の視線の先には、静哉を見て驚いている沙耶の姿が見える。

静哉が1歩踏み出す。

それだけで一気に沙耶のそばまで詰め寄る。

「よお」

「静哉・・・」

沙耶の言葉が詰まる。

「そお、驚くなよ。傷つくぞ？」

「あんた、本当に静哉なの？」

「真正正銘本物です」

「・・・」

不信そうに見つめる沙耶。

「おっと、そろそろ行かなきゃ」

「え？どこに？」

「遊びに」

そう言うと、また1歩下がる。

元の位置に戻った静哉は遠くを見つめはじめる。

少しの静寂と共に何かがかつちに近づいてくるのが見える。
いろいろな色の光がかつちに近づいてくる。

「来たか」

目の前には10人ほどの人がいた。

「时空管理局機動六課隊長陣の高町です」

「同じくフェイト・T・ハラオウンです」

「で？何しに来たの？」

「問題の解決をしにきました」

「ご苦労様」

「君がこの異常の原因なの？」

「さあ？誰だろうね？」

「真面目に答えなさい」

なのはが強く言う。

「ごめんごめん。そんなつもりじゃなかったんだ」

少し焦り気味に静哉は言う。

「うーん。正確に言うと、さっきまでは部外者。今は当事者ってと

こかな」

「？」

「ほんとだぜ？まあ、信じなくてもいいけど」

「では、今すぐこの異常を止めて」

今度はフェイトが強く言う。

「それは無理だ。この世界いや、次元を潰すまではね」

「ふざけるのもいい加減に・・・」

「ふざけているように見えるか？」

そう言うと静哉は右腕を前に出す。

「！」

「とにかく、お前ら邪魔だ」

静哉の右目が赤黒く染まり始める。

さらに静哉は透明の【魔方陣】を作り出す。

「透明の【魔方陣】？」

「FULL DRIVE。魔法は色を選びそれに服従する。俺の魔法を染める」

そう言うと透明の【魔方陣】まほうじんが桜色に染まり始める。

「へえー。お姉さんの魔力色は桜色かあ・・・」

「！なんでそれを・・・」

「答える義理はないよ。スターライトブレイカー」

「！！！！」

機動六課の全員が固まる。

あれほどの短時間で戦闘での接触もなしであれほどの魔力量を集めるなんて、人間の業ではないからだ。

そんな六課の全員に向かつてスターライトブレイカーは放たれる。

それを全員の防御で食い止める。

ガガガガガガガガギギギギギギ！！

嫌な音が鳴る。

ガシユツ

その音と共にスターライトブレイカーの軌道がずらされる。

「まさか、集束法を使わずに!？」

「あー。これそういう出し方するんだ。以後気をつけるよ」

静哉は余裕の表情を見せる。

「君は次元を潰すって言うてたけどなんのためにこんなことを・・・」

「フェイトは問い掛ける。」

「つまらないからかな？よくわからないんだよな」

「そんな理由でッ!」

ガキイン!

フェイトは静哉に斬りかかる。

しかし、それを静哉は片手で止める。いや、透明で薄い【魔方陣】まほうじんで手を覆って止めたといったほうが正しい。

「本当に邪魔だ」

そう言うとフェイトを押し返す。

「まあ、時間はいくらでもあるんだ。俺はひとまず退散させてもら
うぜ」

「待つ……」

なのはがそう言いかけた瞬間静哉は

「ああああああアアアアアアアア……!!」
と、吼える。

ビキッ

「!?!」

吼え終わると空にひびがはいる。

それを静哉は無理やりこじ開ける。

「じゃね」

そう言つと、静哉は虚空に消えていった。

魔法少女リリカルなのは s t r i k e r s - c o l o r s o f t h e m

諸事情によりしばらく休載させていただきます。すいません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1901o/>

魔法少女リリカルなのはstrikers -colors of the magic-

2010年10月25日17時08分発行